

令和 6 年 6 月 2 0 日現在

機関番号：3 2 6 6 3

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022 ~ 2023

課題番号：2 2 K 2 0 0 5 5

研究課題名（和文）植民地期朝鮮の非儒教的養子制度にみる「慣習」と「伝統」の植民地性

研究課題名（英文）The Coloniality of "Custom" and "Tradition" in the Non-Confucian Adoption System in Colonial Korea

研究代表者

田中 美彩都（Tanaka, Misato）

東洋大学・国際学部・講師

研究者番号：9 0 9 6 5 7 9 0

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では近代朝鮮の異姓養子の実態と変化の様相を、帝国日本の家族政策と朝鮮社会の対応から解明した。日本は朝鮮全土で実施した慣習調査で、儒教規範上は禁忌視される異姓養子が地域や階層に応じて異なる方式で行われることを把握しながらも、最終的な報告書ではこのことを反映せずに朝鮮王朝の定義に則り整理した。その後、朝鮮の異姓養子縁組は民籍登録や民事訴訟などを通じて、無効とされたり、便宜上、新たに創出されたりした。日本が朝鮮に婿養子を導入する過程で表出する異姓養子縁組への朝鮮人の認識は、階層や職業、ジェンダーなどで異なった。儒教規範に基づく家族制度に潜む「多様性」は、近現代にも形を変えつつ継続したといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では日本が慣習調査で異姓養子の「多様性」を把握しながらも、最終的には朝鮮王朝の法典上の定義に基づいて異姓養子の概要を整理したことを示した。従来の研究は概ねこの整理の範疇を逸脱しないが、近年の朝鮮時代史研究が紹介する法典の規定外の異姓養子例をふまえると、既往研究は日本の創出した定義を受容した可能性が高い。研究史の再考を促す点に本研究の学術的意義が認められる。また本研究は、現代韓国で家族「伝統」守護の立場をとった儒林が、植民地期には異姓養子導入に反対しなかったことを指摘した。家族の「伝統」が強調されがちな韓国社会を重層的に把握するための視野を提供する点で、本研究の社会的意義は大きいといえる。

研究成果の概要（英文）：This study elucidates the reality and changing aspects of adoption from different patrilineal lineages in modern Korea, focusing on the Japanese Empire's family policies and Korean societal responses to them. Although Japan's customs surveys across Korea revealed that such adoptions, taboo under Confucian norms, were practiced differently based on region and social strata, the final reports organized the findings according to the definitions of the Joseon Dynasty. Subsequently, adoptions from different patrilineal lineages in Korea were nullified or newly created for convenience through family registration and civil lawsuits. Korean perceptions of these adoptions, evident during Japan's introduction of son-in-law adoptions, varied by social strata, occupation, and gender. The "diversity" within the family system based on Confucian norms persisted in different forms into the modern era.

研究分野：朝鮮史

キーワード：朝鮮 家族 儒教 養子 異姓 伝統 宦官 僧侶

1. 研究開始当初の背景

韓国・朝鮮の家族と「伝統」をめぐるのは、近代日本が設置した統監府（1905-1910）と朝鮮総督府（1910-1945）が家族「慣習」を調査し、「慣習」を家族法の法源としたことが注目される。独立後の韓国で制定された家族法は、植民地期の一定程度「慣習」を受容せざるをえず、しかもその「慣習」はまがりなりにも現地調査の結果に基づいていたがゆえに、「伝統」と同一視されることも稀ではなかった。

しかし近年、日本が実施した家族「慣習」調査の一次資料が発掘・整理されたことによって、「慣習」の生産過程、そして「慣習」が「伝統」化した過程を探る研究が進んでいる。本研究も大きくはこの流れをくむが、他方では朝鮮総督府が認定した「慣習」を主な分析対象とするかぎり、当局の関心外にあった朝鮮社会の家族のあり方は照射しえないという限界も指摘することができよう。

2. 研究の目的

本研究では朝鮮の養子を分析対象とし、近代朝鮮の家族「伝統」の生成過程の一端を描出することを目標とした。朝鮮時代には男子がいない場合、儒教祭祀の継承を目的に同一家門から男子一人を迎える、いわゆる立後といわれる養子の形態が奨励され、日本はこの立後を「慣習」と認めた。解放後の韓国民法も長らく同一家門から迎えた同姓養子とそうではない異姓養子に相続権上の差違を設けていた。

しかし先行研究によれば、実社会では高麗時代以来、立後の範疇にあたらない養子縁組も行われてきた。立後よりも立後にあたらない養子縁組の方が朝鮮半島では長い歴史を持つともいえるわけだが、それでも「伝統」とみなされるのはあくまでも儒教規範と紐付いた立後やそれに類する養子縁組である。本研究ではこのように創造された家族「伝統」の意味を、植民地支配という文脈を加味しながら捉えようとした。

3. 研究の方法

本研究ではまず、統監府期に行われた日本による家族「慣習」の調査資料における養子に関する記述を分析した。

その後、いずれも父系血縁外から迎える養子である収養子、宦官・僧侶の養子を主な対象とし、植民地期に朝鮮総督府がこうした例外的な養子にとった家族政策およびそれに対する朝鮮社会の認識の推移を検討した。

4. 研究成果

統監府が実施した家族「慣習」のインタビュー調査の資料では、朝鮮半島の全域で立後に関する言及が見られるが、一方では、ほとんどの地域で儒教祭祀を摂行する資格をもたない異姓の養子に祭祀を摂行させたり、そもそも儒教祭祀の摂行を目的とせず養子を迎えたりするような、立後とは明らかに性格の異なる事例が記録されていた。

植民地化後、「慣習」の調査を引き継いだ朝鮮総督府は、このように実地では儒教一辺倒ではない家族形態の多様性がみられることを把握しながらも、その後に刊行した『慣習調査報告書』においては立後を「慣習」とみなし、多様性についてはほとんど反映させなかった。

他方、「慣習」の調査と同時期に実施された民籍法の施行過程では、スムーズな民籍登録をめざした結果として、立後の範疇から外れる異姓養子縁組もそのまま登録したり、当事者が養子縁組と認識していない関係性を担当者の判断で異姓養子縁組として登録したりするなど、場当たり的な対応がとられた。

このようにして民籍に登録されたこれらの異姓養子縁組は、植民地化以降、民事裁判や家族法・宗教政策の立法・施行の場で問題視された。民籍の登録時には当局がみとめたはずの養子縁組であっても取消を余儀なくされたり、これまでの朝鮮の慣行に基づく養子の選定方法に制限が課されたりした。

さらに朝鮮総督府は、このような異姓養子縁組の排除と並行しながら、婿養子制度の導入を進めた。異なる家門から相手をえらぶという朝鮮の婚姻の原則を適用すれば、婿養子は必然的に異姓とならざるをえない。一見、朝鮮の従来の異姓養子縁組を排除しながら婿養子制度をとりいれようとする朝鮮総督府の対応は矛盾しているが、朝鮮総督府にとって婿養子はあくまでも日本のイエ制度を朝鮮において実現する手段とみなされたと考えられる。

この婿養子制度の導入論議に対する朝鮮社会の受け止め方は、階層や職業、ジェンダーなどの諸条件による差違をみせた。宦官、女性知識人、進歩派弁護士といった朝鮮の一部の人々は、婿養子導入とそれに付随する異姓養子の解禁を肯定的に捉えた。宦官は従来異姓養子によって代を継いできたからであり、女性や進歩派の弁護士は婿への相続が女性の権利拡大に繋がると考えたからである。一方で、解放後の韓国の状況を踏まえると、こうした儒教秩序による家族制度への批判と変更の流れに反発をみせなかった儒林の対応は意外なものである。つまるところ、儒

教規範は濃淡の差こそあれ朝鮮社会に存在しながらも、理想とする家族・親族像や社会像は個々人の属性によって異なっていた。ゆえに、朝鮮総督府による婿養子導入の是非は、養子の姓が同姓か異姓か、儒教規範に合致するか否かという単純なメルクマールだけでは判断されなかったと考えられる。

しかし、婿養子制度の導入をはじめ、従来の朝鮮の家族「慣習」に対する諸般の変更の実施可能性が濃厚になると、朝鮮社会ではかえって儒教秩序に基づく家族こそ朝鮮の「伝統」だとする認識が強化されていった。朝鮮時代には士族層の理想として捉えられた家族・親族組織のイメージが、それ以外の層を含めた朝鮮一般の理想へと拡大していったといえる。こうした過程を経て、朝鮮の養子についても同一家門の男子一人を対象とするものという認識が「伝統」化するが、それは『慣習調査報告書』の記述に即するものでもあった。この認識の強化は、植民地支配から解放された後の韓国の家族史研究にも一部影響を与えた。

上記の成果については、日韓の関連学会・シンポジウムで報告した。そこで得られた知見も加味しながら論文としてまとめ、専門誌に投稿した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 田中美彩都	4. 巻 38
2. 論文標題 コロナ禍で表出した現地活動の重要性と「若手」研究者の世代グループの差異	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 比較家族研究	6. 最初と最後の頁 18, 34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中美彩都	4. 巻 23
2. 論文標題 「儒教社会」朝鮮における家族・親族組織の「多様性」と「伝統」：近現代の異姓養子の変遷を中心に	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 韓国朝鮮の文化と社会	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 田中美彩都
2. 発表標題 近代朝鮮の慣習調査資料をめぐる研究状況と課題
3. 学会等名 第8回 福大韓国学シリーズ（国際シンポジウム）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中美彩都
2. 発表標題 近代朝鮮の儒教的家族制度の展開
3. 学会等名 19世紀朝鮮の国家、法、社会）月例発表会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1．発表者名 田中美彩都
2．発表標題 日韓比較を通じたメタ家族論の試み（3）：韓国の家族「伝統」の形成過程にみる植民地支配の影響
3．学会等名 第96回日本社会学会大会
4．発表年 2023年

1．発表者名 田中美彩都
2．発表標題 近代朝鮮における家族「慣習」と「儒教的伝統」の形成過程：養子制度を中心に
3．学会等名 韓国・朝鮮文化研究会第24回大会（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 田中美彩都
2．発表標題 「儒教社会」韓国の「多様性」と「伝統」：近現代の異姓養子の変遷を中心に
3．学会等名 漢陽大学校韓国法史学研究センター第8回コロキウム（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--------	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------